豊岡短期大学論集　No.14, 77～86（2017）

音楽表現活動に関する一考察

田　上　栄美子

A Study on Musical Expression Activity of Children

Emiko Tagami

豊岡短期大学 論集
第 14 号　別 冊
平成 30 年 2 月 28 日　発 行

音楽表現活動に関する一考察
A Study on Musical Expression Activity of Children

田 上 栄 美 子
Emiko Tagami

はじめに

かつて私たちは、聴きたい音楽を聴くには、レコードを購入するかテレビやラジオから流れてくる音楽を聴く方法しかなかった。音楽を録音するには、マイクと大きなオープンリールのテープレコーダーを準備して手間と時間をかけなければならなかった。一般家庭では、なかなか行えることではなかった。その後カセットテープレコーダーができ、誰でも手軽に「録音・再生」ができるようになった。おかげで、生活の中で歌や演奏などを録音して聴く機会が増え、音楽は私たちの身近な存在となった。あれから半世紀以上たち、少子高齢化、高度情報化、価値観の多様化など社会情勢は大きく変わり、情報通信技術もめざましい発達をとげた。音楽における音（音楽）環境も以前と比べようもないほど変化した。コンピューターやインターネットの普及により、私たちはいつでもどこでもだれでも手軽に音楽に関わることができるようになった。手に入れた演奏の音楽情報（演奏者、演奏形態、演奏場所、録音年月日など）も同時に知ることができるのである。このようにパソコンや携帯電話などが１台あれば、簡単に音楽と関わることのできる時代となったのである。おかげで、私たちは、家に居ながらにして聴きたい音楽を聴くことができ、コンサート会場に行かなくても、映像とともに見たり聴いたりすることができる。また、取り入れた音楽を利用して、私たちは、「歌う」「演奏する」「踊る」「音楽をつくる」こともできるようになったのである。また、今どきのカラオケ店に行けば、J-ポップ、演歌、懐メロはもちろんのこと、童謡、唱歌、こどものうた、合唱曲など、ありとあらゆるジャンルの曲が楽しめる。自分に合った調性やテンポを設定し歌うこともできる。幼児からお年寄りまでいろいろな年代の人が楽しむことができるのである。音楽は私たちの生活に、より一層身近な存在となった。

子どもの生活を見ると、おもちゃ(音楽に関係するおもちゃ)一つとっても、情報通信技術の発達により大きく変化した。昔ながらの素朴なおもちゃもあるものの、いまや電子玩具が主流である。童謡

や子どもの歌がたくさん内蔵され歌ったり演奏したりするおもちゃ、子ども(人間)と会話するおもちゃ、子どもの話し声を瞬時に聴き取り真似をするおもちゃなど、以前では想像もできないおもちゃが開発され、子どもの身の回りに存在する。本物の楽器がなくても、それに似た音を奏でるおもちゃの楽器もあり、子どもはそのつくられた音を弾いて遊んでいる。また、インターネットを利用して子ども向けの音楽やゲームを取り込み、子どもにそれらを与えて遊ばせる養育者も多い。その結果、子どもたちは、家に居ながらにしてつくられた（電子）音やおもちゃから流れる音楽に囲まれて生活することが多くなった。

また、街では、あちこちの店から音楽が流れ、私たちは好むと好まざるにかかわらず音楽を耳にする。それらの音楽は、気持ちを落ち着つかせゆったりとした気分にさせてくれるものもあるが、騒音ともとれる大音量でにぎやかな音（音楽）が流れるところも多い。このようなところで長時間買い物をしている親子を見かけると、その子どもが聴力の異常を起こさないかとこちらが不安になってしまうほどである。私たちは、一歩家を出るとこのような音（音楽）環境の中で暮らすことを余儀なくされている時代でもある。

このように、大人も子どもも半世紀前とは比べようもない音空間・音（音楽）環境の中で生活をしている。コンピューターを介して音楽は一層身近になり便利になった。大人はいいとして、これから成長していく子どもに対して、手軽に手に入るからといってそのような音（音楽）にばかり浸らせてしまっていいのだろうか。このような時代だからこそ、「幼児期の子どもたちに、今本当に必要な音楽とは」を改めて問い直さねばならない。「子どもが心から感動し心にひびく音楽体験のできる音楽表現とは」を問いながら指導の工夫を考えたい。

1.　幼稚園教育要領の改訂について

平成３０年度より改訂される幼稚園教育要領が、平成２９年３月３１日に公示された。子どもたちが未来を切り拓き、人が人として生き抜くために必要な「資質・能力の３つの柱」を軸に改訂された。さらに、それを確かなものとして子どもが身に付けるには、「主体的・対話的で深い学び」による学びの質の向上が重要であるとした。改訂の主なポイントとして、幼稚園教育は、これまでと同様に「環境を通して行う教育」を基本とし、遊びを通して子ども一人一人の特性を踏まえ総合的に指導を行うとした。また、幼稚園教育を学校教育の始まりとして、「生きる力の基礎」を培うとした。「幼稚園教育において育みたい資質・能力の３つの柱」を具体的に示し、教育活動全体を通して育まれた資質・能力の幼稚園修了時の具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に示した。また、「幼小、小中、中高といった学校段階間の円滑な接続(幼小中高教育の一貫した学びの充実)」、「正月、わらべうたや伝統的な遊びなど我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ(伝統や文化に関する教育の充実)」などが主なポイントである。これまでの教育は、「何を知っているか、何ができるようになったか」を中心に指導を考えてきた。これからの教育は、それをもとにして「知っていること、できることをどう使うか」、「どのように他者(社会)と関わり、よりよい生活を送るか」という能力を含めて考えていかなければならないとした。

表-1　　幼稚園教育において育みたい資質・能力の３つの柱

知識及び技能の基礎	何を理解しているか(感じる・気づく・わかる) 何ができるようになったか(できる)
思考力、判断力、表現力等の基礎	理解していること・できることをどう使うか （考える・試す・工夫する・表現する）
学びに向かう力、人間性等	どのように他者(社会)と関わり、よりよい生活を送るか(意欲、協調性、道徳性、社会生活との関わりなど)

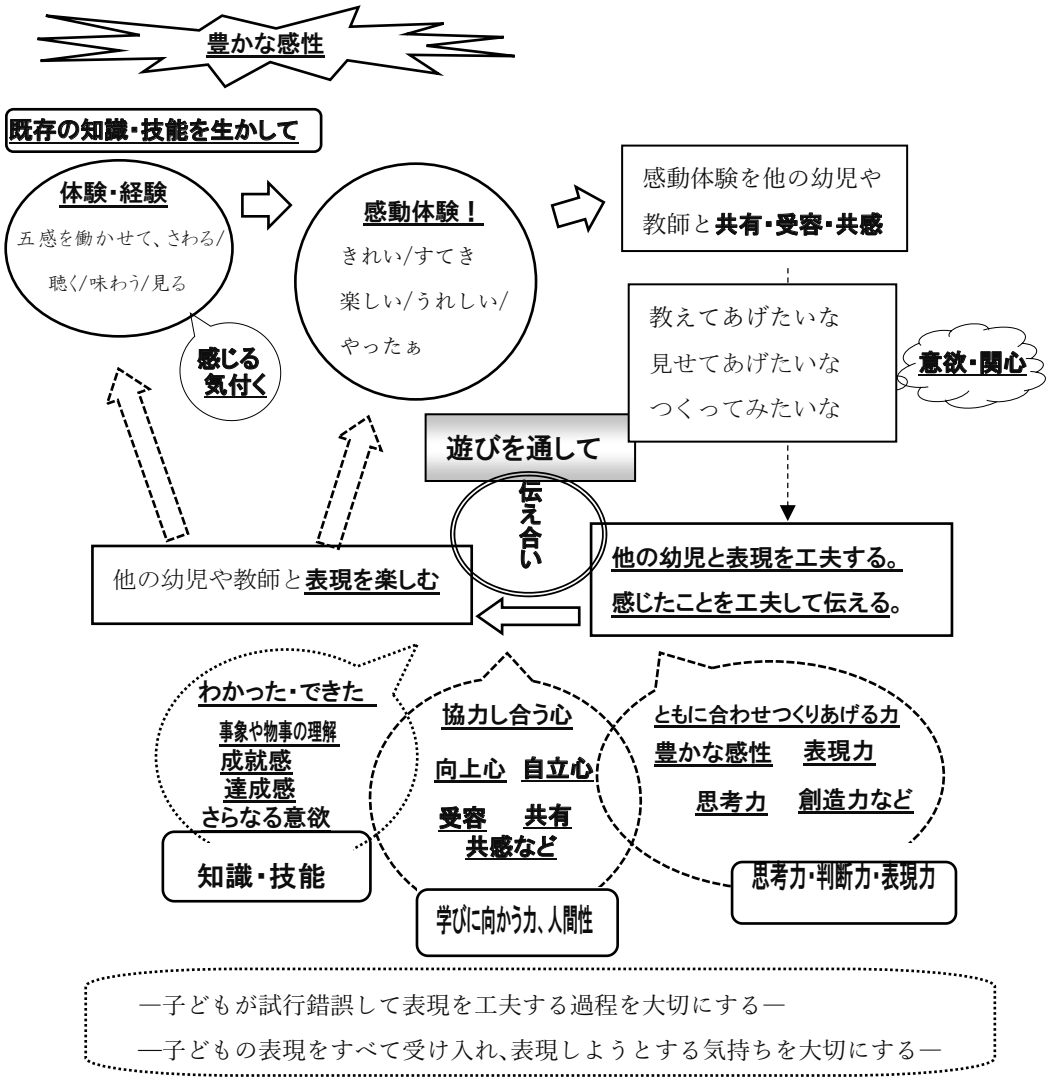
2.　音楽表現を通して求められる資質や能力を育てる

私は、新幼稚園教育要領において音楽表現で求められる資質・能力を、「感性を働かせ、他者と思いを共有・受容したり他者と協働しながら表現を楽しんだり美しさを感じたりできる力」であると考える。図 1 は、音楽表現を通して培う「資質・能力」を示したものである。子どもは遊びを通して、豊かな自然や身近な環境の中でさわったり聴いたり見たり味わったりするなどの体験や経験をする。そこで、いろいろな気付きや発見をする。五感を働かせて「きれいだな」「すてきだな」「楽しいな」と感動する体験を多く経験することが、豊かな感性の育成につながる。「思い（感動）」を他の幼児や教師と共有したり、受容したり共感したりすることが大切であり、その気持ちこそが「誰かに伝えたい」という表現への意欲や関心に繋がる。他の子どもとともに協力して表現活動を行う過程において、つくりあげる力（思考力・判断力・表現力の基礎）や協力する心（学びに向かう力、人間性）を、「言葉による伝えあい」を通して育むのである。さらに、「できた」という達成感や成就感、事象や物事に対する理解、次への表現活動の意欲などの多くを学ぶことができるのである。

3.　音楽表現における指導の工夫

(1)　聴く耳を育てる

豊かな音楽表現を行うには、「聴く」こと、即ち「聴く耳を育てる」ことがとても大事な活動であることを忘れてはならない。子どもたち(人)は、雨の音、風の音、波の音、水道の音、足音、車の音、サイレン等数えきれない様々な生活音に囲まれて生活している。それらの音は、形として残らない。音は、聞こえると同時に消えてしまう。そのような形として残らない音や音楽を素材として、意識して音に耳を傾け消え去ってしまった音をイメージしたり、他者と音を共有したりする活動が音楽表現である。子どもたちには、「きれいな音だね！もっと聞きたいな。」「これはごつごつしたかたそうな音だ！」「この音は、ふわっふわっだね!」など、聞こえた音からイメージして音の違いや感じに気付いたり、大きな音、小さな音、高い音・低い音、柔らかい音、硬い音、スピード感ある音・心地よい音・耳障りな音などに気付いたり…数えきれない本物の音に出会わせたい。



図−１【音楽表現を通して求められる資質・能力を育てる】

事例１

―生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ―

【表現　内容(1)】

聞こえてきた鳥や虫などの鳴き声や木の葉の揺れる音など、子どもたちが普段意識していない音を取り上げ、耳を傾け気付かせる。耳を澄ませて音を感じる時間を、みんなと一緒に楽しむ。ほかにもたくさんの音が存在することに気付き、その音を伝え合い共有し合い音を感じる時間を楽しませる。

―実践記録より(抜粋)―

T　「みんな！カナカナカナ(蜩の鳴き声)ってきこえるよ。」
(先生はすごい発見をしたかのように大げさに)

C1「えっ！」

T　「シーッ。静かにしよう！耳を澄ませてよく聴いてみて。」(内緒話の声で)

C1「あっ、きこえるー！」(にっこりしてうれしそうに)

C2「わたしもきこえるー。」(「私も見つけたよ」と自信たっぷりの気持ちで)

T　「すごいね。もう一度よく聴いてみよう。」
(先生は、聞こえてくる音を遮らないように配慮して内緒話の声で。)

T　「きこえてきたねぇ。あの『カナカナカナ』は、ヒグラシというセミの鳴く声だよ。ヒグラシが鳴き始めると、これから少しずつ涼しくなって秋に近づきますっていう合図だよ。」(内緒話の声で)

T　「もう一度耳を澄ませてみましょう。ほかの音が聴こえるかな。」
(内緒話の声で。体を止めて聴こうとする気持ちをもたせる)

C3「ブゥ―って、車の音がきこえるよ。」
(子どもたちも、先生のように内緒話の声で話し始める。)

子どもたちは、みつけた音を聴き合い、共有し合って音を楽しむ!!

C4「チチチチチチ！チチチチチチ！虫だよ。」

C5「葉っぱがシャラシャラシャラって。」

T　「ザザザザ。サラッサラッって。これも葉っぱだ。」…

― 子どもたちが見つけた音 ―
お隣の子どもの息づかい、くしゃみや咳、誰かの話し声、自動車が通り過ぎる音、救急車のサイレン、飛行機の音、虫や鳥の鳴き声、草や木の葉が風に揺れる音、ドア(戸)が開いたり閉まったりする音、園舎から聞こえてくる先生や子どもの声、カーテンが開いたり閉まったりする音、物が落ちた音、工事現場の音等々

事例２

―いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ―【表現　内容(５)】

それぞれの楽器のひびきに耳を傾け、音のリレー遊びをする。

子どもたち一人に１つずつ楽器を準備し、自由に選ばせる。この時、楽器の取り合いにならないように配慮が必要！楽器が決まったら自由に鳴らしていろいろな音を見付ける。振る、こする、打つなどいろいろな奏法を工夫していろいろな音を見付ける。みんなにきかせてあげたい音(鳴らし方)をみつけられるようにする。音(楽器)遊びを行った後、音のリレー遊びをする。

① みんなの顔が見えるように輪になって座る。

② 楽器を順番に鳴らして音のリレー遊びをする。「前の人の音が消えたら自分の音を鳴らしましょう。」

③ 最後の人の音が消えたらみんなで一斉に音を鳴らす。

④ 最後の音が消えるまで、おしゃべりしたり不要な音を出したりしない。順番を守ることを約束する。

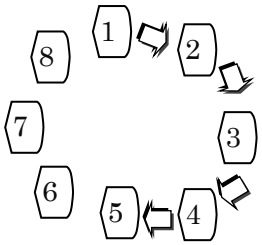


図-2

１番が音を鳴らす。→１番の音が消えたら２番が音を鳴らす。→２番の音が消えたら３番が音をならす。…８番の音が消えたら全員で音を鳴らす。音が消えるまで待つ。

※楽器は、ひびきが長く続くもの、短いものを混ぜると楽しい。人数が多い場合は、同じ楽器が複数になってもよい。

ひびきが長く続くもの…すず、スレイベル、トーンチャイム、トライアングル、鉄琴（卓奏用）、シンバルなど

ひびきが短いもの…カスタネット、シェーカー、クラベス、木琴（卓奏用）、タンブリン、マラカスなど

※音の出るおもちゃや身の回りにあるものなどを使っても楽しい。

【指導のポイントー１】

① 普段気づかなかった音、知らなかった音を見付ける（発見する）ことは、子どもにとって楽しい活動である。子どもが耳を傾けて見付けたり感じたりした「音」との出会いを大切にする。

② 子どもは、同じ音を聴いても同じようには聴いていない。年齢や発達、生活経験や体験などによって見方も感じ方も違う。そのため、子どもの表現も一人一人違う。子ども一人一人が感じた「音」を大切にし、そのイメージをみんなで共有し合い感じ合う。

③ 事例１や事例２は繰り返し行うことで、たくさんのいろいろな「音」の存在に気づいたり、素材が奏でる音を楽しんだりすることができる。「音に耳を傾ける」活動から自然や物事、楽器などに興味・関心をもったり理解したりすることができる。

④ 音のきこえ方は、大人と子どもとは違うということを認識して保育しなければならない。大人は、音をきき分けて周囲の出来事や音の風景を把握したり、必要な情報だけを取り入れたりしてききたい音を聴くことができる。しかし、乳幼児は、ききたい音を選ぶことが難しく、きこえてくる音の全体を受け取って聞いている。年齢が低いほど複数の音から必要な音を選んできくことがうまくできない。したがって、年齢や一人一人の状況によって問いかける言葉を選ばなければならない。「いろいろな音がきこえるよ。きいてみよう」と問いかけるほうが見付けやすい子どももいるだろうし、「〇〇の音がきこえてくるよ。きいてみよう」と問いかける方がいい子どももいる。子どもへの言葉かけを吟味し、指導にあたることが求められる。

(2)　体で拍を感じよう

子どもは、動くことが好きである。良く言えばよく動くから活動的、悪く言えばじっとすることができない(苦手)。動くことが好きな子どもたちに、「動かない」時間を十分味わわせることによって、動くことの楽しさを体感させる。歌を歌ったり合奏したりするなどの表現をするうえで大切な拍を、音楽をよく聴き耳を働かせて感じさせる。

事例３

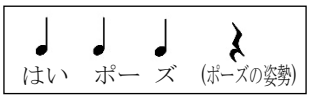
―感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする―【表現　内容(４)】

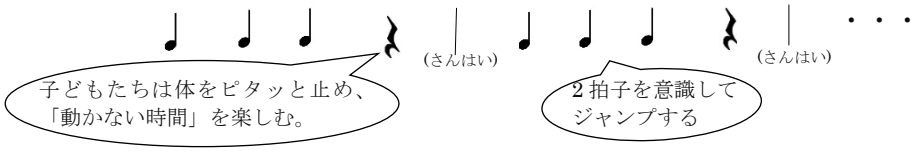
子どもは、曲に合わせて、「１　２　１　２　１　２…」と見本を示してあげれば、上手に唱えられる。しかし、「歩く」「ジャンプする」など拍の流れを感じて体を動かすことになると、途端に拍を無視した動きになってしまう。そこで、「動く」楽しさと「動かない」楽しさを組み合わせた遊びを通して拍を感じさせる。

①　子どもたちは、先生の「１　２　１　２…」の号令に合わせてジャンプする。
②　ジャンプする時間は、子どもの様子によって長くしたり短くしたりして変化を持たせる。
③　「はいポーズ」の号令で、即興的にカッコいいポーズ（「動かない」）をする。ポーズの約束は、体をピタッと止めて動かない、声を出さない。全員が体を止めて動かない時間を１０～１５秒間程度とる。（子どもの実態に合わせて、もう少し長くてもよい。）
④　「さんはい」の号令でジャンプを再開し、①②を繰り返す。
⑤　ポーズは、１回１回違うポーズをする。しかし、ポーズが見つからない子どもには、同じポーズを何回してもいいことにする。

実践記録より（抜粋）

Ｔ　「いろいろなポーズできるかな？」
Ｃ1　「できる。」
Ｃ2　「できる。」
Ｔ　「ポーズができるの。すごいね。見せてほしいな。」
(子どもたちは、それぞれ思い思いのポーズをやって見せる。)
Ｔ　「すごいねぇ。カッコいいねぇ。じゃあ先生が『はいポーズ』って言ったら、カッコいいポーズをして見せてくれますか」
Ｃ3　「はい」
Ｔ　「じゃあ始めましょう。はいポーズ」
(子どもたちは、思い思いのポーズをする。)」
Ｔ　「みんなすごいねぇ。１回ずつポーズをかえられるかな。」
Ｃ4　「はーい」
Ｔ　「はい　ポーズ　(ポーズ)　はい　ポーズ　(ポーズ)　～」





Ｔ　「１　２　１　２　１　２に合わせて飛びましょう。」
Ｔ　「１　２　１　２　１　２…はいポーズ！(動かない時間を楽しむ) さんはい　１　２　１　２　１　２…はいポーズ！…」(連続して行う)

【指導のポイントー２】

①　テンポを速くしたり遅くしたりすることにより、意識して「拍」をとるようになるので効

果的である。

② 号令で慣れてきたら、曲に合わせて行っても楽しい。使用する曲は、拍がはっきりしているものがよい。例えば、「さんぽ」「なべなべそこぬけ」「ブンブンブン」など。

③ 先生がピアノを弾く場合は、テンポを速くしたり遅くしたりすることができる。子どもの動きを見ながらテンポを変化させて「動く」と「動かない」を楽しませる。

④ ＣＤを使う場合は、「一時停止」を使って「動かない」時間をつくるとよい。この場合、先生は、子どもたちと一緒に活動できるので、子どもたちに言葉かけや援助がしやすい利点もある。また、支援の必要な子どもの近くにいて配慮することもできる。

⑤ ＣＤを使ったり先生が弾いたり、子どもの実態に合わせて組み合わせるのも良い。

事例４

－自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう－

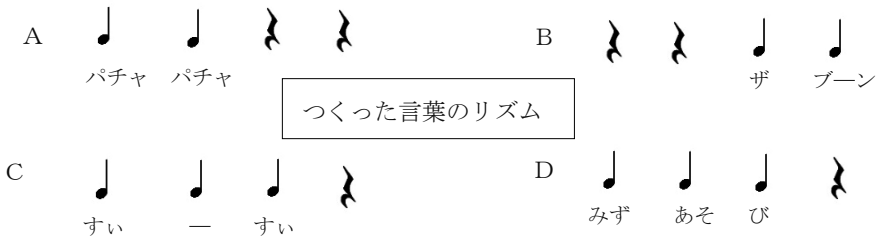
【表現　内容（８）】

事例１で見付けた音や子どもがイメージしやすいものをテーマとして取り上げ、イメージする言葉（音）を出し合い、言葉のリズムを考えて表現遊びをする。発展として、２つの言葉を組み合わせて、掛け合いを楽しんでもよい。慣れてきたら他の言葉で遊んでみる。

実践例

① 「みずあそび」をイメージする言葉を出し合う。

② 見付けた言葉（「パチャ パチャ」「ザ ブーン」「すぃーすぃー」「みずあそび」）にリズムをつけて遊ぶ。



【指導のポイント－３】

① ４拍子の拍の流れに乗って、リズミカルに唱える。「拍」をしっかり意識させる。

② 手拍子などで拍をとり、「言葉のリズム」を何度も唱え楽しむ。慣れてきたら「言葉のリズム」から２つ選び、掛け合いをしてもよい。さらに、３つ、４つと言葉の数を増やし、グループに分かれて言葉（音）を重ねて遊ぶと楽しい。

③ 掛け合いをする場合、子どもたちが自由に組み合わせを考えて行うと楽しい。

(3) いろいろな声で遊ぼう

小学校新学習指導要領「音楽」第１、２学年Ａ表現（１）歌唱は、「(ア）範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能（イ）自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能(ウ)互いの歌声や伴奏を聴いて，声を合わせて歌う技能」の習得と示されている。私の知る限

りでは小学校に入学して間もない子どもは、「地声」「力いっぱい」「元気よく」「大きな声」で歌うのが大半を占める。小学校音楽科では、この歌い方から「自然で無理のない声」に移行するように指導していくわけである。多くの子どもは、「自然で無理のない声」を無理なく見付けることができる。しかし、一部の子どもは、地声以外の声を見付けることができず四苦八苦する。歌いたくない気持ちのため「音楽はきらい」につながってしまう。そこで、幼児期にいろいろな声を見付ける遊びを経験しておくと、小学校入学してからの音楽科の授業がとてもスムーズになる。

事例５

―生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ―

【表現　内容（１）】

事例１で見付けた音のまねをしたり、いろいろな場面や様子を想像したりして表現遊びをする。

実践例

（例１）「コツコツコツコツ」と足音が聞こえた を素材に、音をいろいろ想像して表現する。

・○○○○が歩くと、どんな足音かな？

○○○○に入れる言葉（例）	園長先生、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、くま、うさぎ、ねこ、かめ、たぬき、犬、馬、へび、りす、ねずみ、ロボット、すずめ、カラス、恐竜、アニメのヒーローの名前など

（例２）「カナカナカナ(蜩の鳴き声)ってきこえるよ。」から、いろいろな鳴き声を想像して表現する。

・「○○○犬が鳴くと、どんなかな？」

○○○○に入れる言葉（例）	小さい、大きい、お父さん、お母さん、赤ちゃん、お兄さん、元気な、おなかがへった、眠たい、お友達と遊んでいるなど

（例３）２人ペアで行う。Ａは、手を上げたり下げたり自由に動かす。Ｂは、Ａの手の動きに合わせて、声を出す。手を高く上げれば高い声、低く下げれば低い声を出す。手の動きによって高い声や低い声を出して音高を表現し自分の声で遊ぶ。

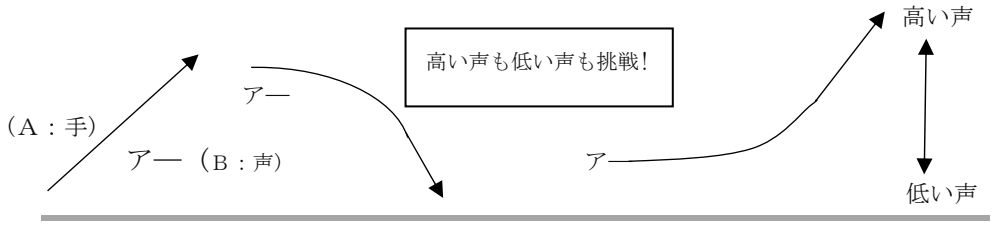


図-3

終わりに

私は、日々子どもたちと接していると、“子どもは好奇心の塊だ”と感じる。だれもが「いろいろなことをやってみたい」「疑問や不思議なことに出会ったら確かめたい」「友だちと仲よく楽しみたい」「がんばりたい」「大きく成長したい」「できたという喜びを味わいたい」などと思っている。そんなときの子どもの目は、キラキラ輝いている。人に優しくみんなが仲良くできる集団で過ごした子どもは、集団への所属意識が芽生える。思いやりの心が育つ。自分の思いや自分のいろいろな良さや可能性が生かされたとき、「できた」「がんばった」「わたしってすごい」と自分の力に気付き、心を開いて自分の表現をするようになる。子どもたちが身近な音や音楽に耳を傾け、「きれいだな」「もっとききたいな」「いいね」と感じられる音楽表現を体験させ、美しいと感じる心を育みたい。子どもたちの「よくなりたい」という願いの実現に向けて、子どもの持っている資質や能力、技能を最大限に発揮し、伸ばし、高める指導の在り方を今後も探究したい。

【引用文献】

文部科学省「平成29年度幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉」チャイルド本社　2017
文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年3月31日公示）比較対照表」文部科学省
http://www.mext.go.jp./a_menu/shotou/new_cs/1384661_4_1_1.pdf

【参考文献】

文部科学省「平成29年度幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉」チャイルド本社　2017
文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年3月31日公示）比較対照表」文部科学省
http://www.mext.go.jp./a_menu/shotou/new_cs/1384661_4_1_1.pdf
文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 2015
厚生労働省「保育所保育指針解説書」フレーベル館 2015
内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園・保育要領」フレーベル館 2015
菅井彩子「教育音楽 小学校版 2017　6月号」音楽之友社 2017
石上則子監修「音楽づくり・創作の授業デザイン」教育芸術社 2017
小西行郎、志村洋子、今川恭子、坂井康子「乳幼児の音楽表現」中央法規出版株式会社 2016
小西行郎・遠藤利彦「赤ちゃん学を学ぶ人のために」世界思想社 2012
小西行郎「赤ちゃん学カフェ 2008　vol.1」ひとなる書房 2010
小西行郎「赤ちゃん学カフェ 2009　vol.2」ひとなる書房 2009
小西行郎「赤ちゃん学カフェ 2010　vol.3」ひとなる書房 2010
髙倉弘光「音楽・からだで感じる授業づくり」東洋館出版 2005
髙倉弘光「髙倉先生の授業研究ノート」音楽之友社 2017
寺尾正「聴き合う耳と響き合う声を育てる合唱指導」音楽之友社 2017
村上玲子、櫻井琴音、上谷裕子「子どもの発達と音楽表現」学文社 2015
河口道朗「音楽教育入門」音楽之友社 2003
今川恭子監修「音楽を学ぶということ」教育芸術社 2016